

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A study of of human bondage : on Spinoza's the ethics

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2000-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梶田, 理子, Kajita, Satoko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1420

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



W. S. Maugham, *Of Human Bondage*

に関する一考察

— Spinoza, *The Ethics* をめぐって —

梶 田 理 子

I

W. S. Maugham (1874-1965) 著『人間の絆』(*Of Human Bondage*)¹の題名が、Benedict de Spinoza (1632-1677) 著『エチカ』(*The Ethics*)²の第四部 “The effects of human bondage, or the powers of affects” から引用であることは、Maugham 自身が記すところである³。Spinoza はその第四部の序言において、人間の感情に対する隷属状態について語っている。

Man's lack of power to moderate and restrain the affects I call bondage. For the man who is subject to affects is under the control, not of himself, but of fortune, in whose power he so greatly is that often, though he sees the better for himself, he is still forced to follow the worse. In this part, I have undertaken to demonstrate the cause of this, and what there is of good and evil in the affects.⁴

この序言に言及されている様に、「感情を統制し抑制する上での無能力の状態を隷属と呼び、感情に支配される人間は自己自身の支配の基にはなく運命の支配の基にある⁵」という主題は、『人間の絆』における Maugham の

1 Maugham, W. S. *Of Human Bondage* (Harmondsworth: Penguin Books, 1992) 本文の引用はこれによる。以下は頁数のみを記す。

2 Spinoza, Benedict de. *A Spinoza reader: the Ethics and other works*, Trans. and ed. Edwin Curley. (New Jersey: Princeton University Press, 1994) 本文の引用はこれによる。以下 *The Ethics*, 並びに頁数のみを記す。

3 Maugham, “I chose finally the name of one of the books in Spinoza's *Ethics* and called my novel *Of Human Bondage*.” In foreword of *Of Human Bondage*, p. 7

4 *The Ethics*, pp.197-198

5 日本語訳に関しては、梶中尚志訳『エチカ—倫理学』上・下 (岩波文庫, 2000) を参照しているが、筆者による加筆・修正をしている箇所も含む。

化身である主人公 Philip の、感情の隷属状態に囚われて止まない人生の変遷を的確に表している。

また、Maugham 自身も Spinoza の思想を享受していることは、『要約すると』(*The Summing Up*⁶) に記述されている。

For my part, of the various theories of the relations between matter and spirit that are offered by the philosophers for the consideration of the plain man that which still seems to me most satisfactory is Spinoza's conception that substance⁶ thinking and substance extended are one and the same substance.

Its (every living thing) satisfaction is the self-satisfaction which Spinoza has told us is the highest thing for which we can hope, 'for no one endeavours to preserve his being for the sake of any end (emphasis added).'⁷

「思惟する実体と延長した実体とは一つにして、同一なる実体である」という身体(=物体)と精神の合一についての Spinoza の心身並行論⁹は、『人間の絆』において Philip の最終的に到達した人生観にも反映されている。それは、club-foot(先天性の足の奇形)という身体的障害を負いながらも、それを自己の一部として受け入れ、自己自身の為の人生を全うする Philip の姿勢である。また、「人間は何らかの目的ではなく、自己の安息のために自己の存在を保持しようと努める」という Spinoza の思想¹⁰も、Persian rug(ペルシャ絨毯)に表象される Philip の人生観において克明に記されている¹¹。

Philip は、学生時代を通して幾多の哲学書に触れる。その中でも特に Philip は「Spinoza に畏敬の念を感じ、その思想ほど気高く近寄りがたい精

6 Maugham, W, S. *The Summing Up* (Harmondsworth: Penguin Books, 1963) 本文の引用はこれによる。以下は頁数のみを記す。

7 *The Summing Up*, p.172

8 *Ibid.*, p.182

9 Cf. 『エチカ』, 第二部定理13。

10 Cf. *Ibid.*, 第四部定理52備考。

11 *Of Human Bondage*, pp.524-525

神に触れたことはなかった」けれども、彼自身の人生観を獲得するまでは「それらの内の何れにも彼が欲するものを見出すことができなかつた。¹²」しかし、Maugham 自身並びに『人間の絆』が『エチカ』の特筆すべき影響下にあることは、上述の通りである。本論では、『エチカ』に対する Maugham の視点を考慮することに焦点を絞り、『人間の絆』に描かれる『エチカ』の思想を紐解いていきたい。特に『エチカ』における第一種から第二種、第三種への認識の移行、及びモラル（道徳）とエチカ（生態の倫理）に照合させながら、club-foot から生じた感情の隷属状態にある Philip が如何にしてそれに対する認識を変遷させ、その隷属状態を克服していくのかを検討する。また、その結果より導き出される、社会と個人との関係における Maugham 並びに Spinoza の思想にも言及を加えることとする。

II

Spinoza は『エチカ』の中で、三種類の認識について言及している。¹³「偶然的出会い」である第一種の認識、「関係の合成」である第二種の認識、そして「本質」である第三種の認識である。

Spinoza は第一種の認識について、「精神は物を自然の共通の秩序に従って知覚する場合には、言い換えれば外部から決定されて、すなわち物との偶然的接触に基づいて、このものあるいはかのもを観想する場合には、常に自分自身についても自分の身体についても外部の物体についても妥当な認識を有せず、単に混乱しく毀損した認識を有するのみである」と定義している。¹⁴つまり、「偶然的出会い（接触）」（“fortuitous encounters”）における「漠然たる経験」（“random experience”）に基づいた、「原因である個体の本質についても身体の本質についても明晰に表現していない「非十全な観念」

12 *Ibid.*, p.258

13 Cf. 『エチカ』, 第二部定理40備考2。三種類の認識については、ジル・ドゥルーズ 工藤喜作・小柴康子・小谷晴勇訳『スピノザと表現の問題』（法政大学出版局, 1991）, 第18章「第三種の認識に向かつて」並びに第19章「至福」において詳細に言及されている。

14 Cf. *Ibid.*, 第二部定理29備考。

(“inadequate idea”)¹⁵を第一種の認識としている。そして、第一種の認識には「喜び、悲しみ、欲望」という三基本情動が関係している。¹⁶「喜び」(“joy”)とは「精神がより大なる完全性へ移行する受動」であり、「私の身体の特徴的關係が外部の個体の特徴的關係と合成」¹⁷した結果であり、「善」(“good”)となる感情である。「悲しみ」(“sadness”)とはその「合成が失敗」した結果であり、「精神がより小なる完全性へ移行する受動」であり、「悪」(“evil”)となる感情である。「喜び」が更に前進し「欲望」(“desire”)するようになるが、この第一種の認識においてその情動は受動的情動¹⁸であり、能動的情動に至るには第二種の認識へと向かわねばならない。

この第一種の認識は、Philipの如何なる認識過程に照合可能なのであろうか。Philipにおいての「偶然的出会い」は、幼少時代の母の死並びにclub-footとして考察でき、その両者から齎される自己犠牲的な言動が、Philipの「喜び」を表象している。

...it seemed to him—he was nine years old—that if he went in they would be sorry for him....Though crying, he keenly enjoyed the sensation he was causing; he would have been glad to stay a little longer to be made so much of,...

Presently Philip made an effort and spoke again.
‘Tell him I’ve got a club-foot,’ he said.

Philipは、母の死並びにclub-footに「偶然的出会い」をし、幼くして母を亡くした自分に対して他者から憐れみを受けることに、また自分のclub-footを他者に知らしめることに「喜び」を見出すという自己犠牲的な

15 田中敏彦『個体論（I）—スピノザの個体様態観について—』（『神戸外大論叢』第四十巻・第二号、1989）、p.25

16 Cf. 『エチカ』、第三部定理11備考。

17 田中、*op.cit.*、p.27

18 Cf. 『エチカ』、第三部定理57証明。

19 *Of Human Bondage*, p.12

20 *Ibid.*, p.39

言動を取り始める。つまり、この時点で Philip は、母の死と club-foot が他者の目に如何に捉えられるのかという観点に立ち、両者から生ずる自己犠牲的な言動を通して他者に齎す “sensation” に歓喜しているのである。しかし、第一種の認識における Philip のこの「喜び」は、彼自身の主観的判断による能動的情動ではなく、他者の目を通した客観的判断による受動的情動であると言える。その証拠に、club-foot が後に Philip の「悲しみ」を誘発することを彼は認識しておらず、「非十全な観念」の下にいると言える。

He was not crying for the pain they had caused him, nor for the humiliation he had suffered when they looked at his foot, but with rage at himself because, unable to stand the torture, he had put out his foot of his own accord.²¹

Philip は、学校において club-foot が原因で同級生からの苛めを受け、彼らの前に club-foot を自ら曝け出した自己自身に対して “rage” という「悲しみ」を感じる。Philip は、以前には他者への “sensation” を巻き起こす自己犠牲的な行為に「喜び」を見出していたが、club-foot という彼の身体の「本質」に「悲しみ」が齎されることを認識した為に、その「喜び」と「悲しみ」の狭間で翻弄される。

Philip passed from the innocence of childhood to bitter consciousness of himself by the ridicule which his club-foot had excited.... Beneath his painful shyness something was growing up within him, and obscurely he realised his personality. But at times it gave him odd surprises; he did things, he knew not why, and afterwards when he thought of them found himself all at sea.²²

Philip は、club-foot から生ずる「喜び」と「悲しみ」という相反する二面性を認識する。前者は彼にも不明瞭である内面世界の “personality” に属する「冒険的気質」（“an adventurous disposition” (p.47)), つまり「喜

21 *Ibid.*, pp.45-46

22 *Ibid.*, p.50

び」を齎す自己犠牲的な言動を、後者は他者との関係において現実世界で生きる場合の「内気さ」(“shyness”), つまり「悲しみ」を齎す他者からの罵倒を意味している。Philipはこの二面性に対応する為に、あらゆる手段を講ずる。「精神は身体の活動能力を減少するあるいは阻害するものを表象する場合、そうした物の存在を排除する事物を出来るだけ想起しようと努める²³」のである。Philipは「身体は精神の命令だけであるいは運動しあるいは静止し、行動の多くは単に精神の意志と思考力にのみ依存している²⁴」と認識しているが為に、精神の力により「悲しみ」の起因である身体のclub-footの排除を切望している。他者の身体に自分の精神を投入するという仮想状態もその一つである。

He took to a singular habit. He would imagine that he was some boy whom he had a particular fancy for; he would throw his soul, as it were, into the other's body, talk with his voice and laugh with his heart; he would imagine himself doing all the things the other did. It was so vivid that he seemed for a moment really to be no longer himself. In this way he enjoyed many intervals of fantastic happiness.²⁵

Philipはclub-footから生ずる「悲しみ」を減少させる為に、club-footそれ自体を放棄し、他者の身体に自己を投影し「喜び」を見出している。また、牧師館や学校の敬虔な宗教的雰囲気の中で教育を受けるPhilipは、「信仰心があれば山をも動かすことが出来る」(“...if you have faith you can remove mountains.”) (p.53)²⁶という聖書の言葉を信じ、彼の「悲しみ」の起因であるclub-footの完治を祈る。彼は、信仰心により身体の苦痛の排除を切望しているのである。

Philipは「悲しみ」の消失と同様に、「喜び」の増大を促す為に自己犠牲

23 Cf. 【エチカ】、第三部定理13。

24 Cf. *Ibid.*、第三部定理2備考。

25 *Of Human Bondage*, p.72

26 Mark. 11:23., Matt. 21:21.

的な言動を繰り返す。

Though he dreaded humiliation more than anything in the world, he hugged himself for two or three days at the thought of the agonizing joy of humiliating himself to the Glory of God. But he never got any further. He satisfied his conscience by the more comfortable method of expressing his repentance only to the Almighty. But he could not understand why he should have been so genuinely affected by the story he was making up.²⁷

‘As long as you accept it (club-foot) rebelliously it can only cause you shame. But if you looked upon it as a cross that was given you to bear only because your shoulders were strong enough to bear it, a sign of God’s favour, then it would be a source of happiness to you instead of misery.’...His spirit seemed to free itself from the bonds of the flesh and he seemed to be living a new life. He aspired to perfection with all the passion that was in him. He wanted to surrender himself entirely to the service of God, and he made up his mind definitely that he would be ordained...he could accept the humiliation joyfully; and as he limped up the chancel, very small and insignificant beneath the lofty vaulting of the Cathedral, he offered consciously his deformity as a sacrifice to the God who loved him (emphasis added).²⁸

Philipは、自ら購入したペン軸を友人に壊された時、それは母の唯一の形見であると嘘をつき涙を流す。Philip自身にも把握することが出来ない、「混乱しく毀損した>認識」下における「喜び」の起因となるこの言動には、母の死の認識から生ずる自己犠牲的な「喜び」に加えて、キリスト教的神への犠牲心による「喜び」が包有されている。その「犠牲心」とは、Philip自身の「喜び」を齎す為のものであって、神との直接的な関係を求める純粋な信仰心ではない。同様に、Philipはclub-footを神への犠牲として捧げることにより、“cross”を背負ったキリストの姿と、club-footを引きずりなが

27 *Ibid.*, p.51

28 *Ibid.*, p.71

ら歩く自分自身の姿を重ね合わせることに「喜び」を見出し、「悲しみ」を齎す身体の柵から解放されたと感じている。

He began to forget the presence of God which had seemed so surrounding; and his religious exercises, still very punctually performed, grew merely formal.²⁹

しかし、Philipは「喜び」を齎す神への犠牲によって、「悲しみ」の起因である club-foot を排除することを断念し始める。つまり、「我々の身体の使用を排除する観念は我々の精神の中に存することが出来ない³⁰」故であり、Philipはキリスト教への信仰心そのものも喪失していく。

Philipのキリスト教への信仰心の喪失を考察する上で注目すべきものに、モラル（道徳）とエチカ（生態の倫理）があり、両者の相違はPhilipの認識の移行をより明確に立証するものである³¹。モラルとは「意識によって情念〔心の受動〕を制しようとする」ものであり、「神の裁き〔判断〕であり、＜審判＞の体制」に他ならず、「道徳的な法とは、なすべきこと・あるべきこと〔義務・本分・当為〕であり、服従以外のなんの効果も、目的ももたない」ものである。問題は、「こうした道徳的もしくは社会的な法が私たちに何ら認識をもたさず、何も理解させてくれない」ことにあり、「法はただたんに認識を準備し、それを可能ならしめるにすぎない³²」のである。つまり、モラルは「個体の立場を超越した社会的ないし宗教的価値としての善悪に基づけられる³³」ものであり、その善悪を絶対的としたものである。

Philipのキリスト教への信仰心の喪失はこのモラル的立場に基づいている。

29 *Ibid.*, p.72

30 Cf. 「エチカ」第三部定理10。

31 Cf. Deleuze, Gilles. *Spinoza: Practical Philosophy*, Trans. Robert Hurley. (San Francisco: City Lights Books, 1988) 日本語訳に関しては、鈴木雅大訳『スピノザ実践の哲学』（平凡社、1995）を参照しているが、筆者による修正をしている箇所も含む。モラル・エチカの差異については、第二章「道徳と生態の倫理のちがいについて」に詳細に言及されており、ここではその差異の指摘を取り上げ、論を進めていくものとする。

32 ドゥルーズ, p.40

33 田中, *op.cit.*, p.29

つまり、Philipは、club-footを排除する為のキリスト教への道徳的信仰心からは何も齎らされないことを理解し、「悲しみ」の起因である club-foot に対して、キリスト教的神という個体の立場を超越した宗教的価値による「悪」の判断を下すことを放棄したのである。

club-footへのモラル的「悲しみ」を排除したPhilipは、彼の「喜び」を増大させる為の自己犠牲の行為を、Mildredとの愛憎関係において繰り返していく。両者の関係は『人間の絆』において三分の一以上を占め、Philipは彼自身の人生観に到達した後の最終章においても、彼女への激情に駆り立てられる。Philipは、Mildredには一つも長所が無いことを知りながら、彼のことを気に留めず冷淡な態度を示す彼女に惹かれていく。PhilipはMildredに好意を示された場合には歓喜し、逆の場合には憎悪を感じ、再び彼の自己犠牲を呼び起こす慈悲を彼女に求めていく。「愛と軽蔑が同時に存在することほど、ひどい苦しみはない」(“He thought to himself that there could be no greater torture in the world than at the same time to love and to contemn.” (p.299))と知りつつも、自己犠牲の「喜び」を齎す彼女の存在を追い求め、「心情の動揺」(“vacillation of mind”³⁴)を引き起こした完全な感情の隷属状態に陥っているのである。「愛する女からひどく取り扱われた者もまた、女の移り気やその不実な心や、その他歌の文句にある女の欠点などのことしか考えない。しかも愛する女から再び迎えられると、これらすべてのことをただちに忘れてしまうのである。」³⁵

PhilipのMildredへの愛憎や自己犠牲を示唆する言動は多々ある。Philipは、MildredがMillerと結婚する際に、彼女が喜ぶと同時に彼女に対する彼の軽蔑を示す華美で高価な品を選ぶことに、「憂鬱な満足感」(“a melancholy satisfaction” (p.308))を感じる。MildredがPhilipの友人であるGriffithsと恋愛関係になれば、自分と行く予定であった旅行に

34 Cf. 『エチカ』、第三部定理17備考。

35 Cf. *Ibid.*、第五部定理10備考。

Griffiths と行くことを彼女に薦め、「異様且つ捉え難い感動」(“a strange, subtle sensation” (p.372)) を覚える。Philip は、Mildred に感情的な悲しみを見せないことを配慮し、自己犠牲的な行為を成し遂げる自分を英雄の様に感じているのである (“He was heroic.” (p.304))。

Philip は、彼の自己犠牲の「喜び」の起因である club-foot に関しても、club-foot が齎す苦しみを Mildred に訴え、彼女の慈悲を乞うことを切望している (“‘You don’t know what it is to be a cripple. Of course you don’t like me. I can’t expect you to.’” (p.297))。また、Mildred が Miller と去った後、Philip は Norah と恋愛関係になる。Norah は Philip の club-foot に対し憐れみを示してくれるが、Philip は Norah のその憐れみから齎される「喜び」よりも、より増大した自己犠牲の「喜び」を齎らしてくれる Mildred を再び受け入れることになる。

Philip の自己犠牲の行為は、Mildred との関係以外の言動にも窺うことが可能である。Philip は医学校での試験に落第した折、屈辱を感じながらも学校へ向かい、自虐的な態度を払うことに陰鬱な「喜び」を感じている (“... he wanted to inflict suffering upon himself.” (p.289))。Philip は自虐的な感情の支配下にある場合、「奇妙な活力」(“a singular vigour” (p.324)) を感じ、「異常な力」(“unwonted force” (p.324)) によって彼の心は動かされているのである。Philip は、彼を捕らえ続けるその「異常な力」は、「理性」とは程遠いものであると感じている (“The power that possessed him seemed to have nothing to do with reason.” (p.323))。「理性」に導かれるには、第二種の認識への移行を待たねばならない。

ここで、エチカに関する考察が可能となる。道徳的善悪を絶対的価値とするモラルに相對するエチカとは、「全自然の永遠の法則に従い、それぞれの秩序に応じて複合・合一をとげる各個の構成関係の姿³⁶」であり、その各個体の立場における善悪を考慮したものである。つまり、「ある体〔身体または

36 ドゥルーズ, p.37

物体}がこの私たちの身体と出会いそれとひとつに組み合わせるとき、ある観念がこの私たちの心と出会いそれひとつに組み合わせるとき、私たちは喜びをおぼえ、また反対にそうした体や観念によってこの私たち自身の結合が脅かされるとき、悲しみおぼえるのである。³⁷

Philipはclub-footを「悪」として捉えるモラル的立場を捨て、club-footを彼自身の「喜び」を増大させるものとして捉えるエチカ的立場へと認識の移行をしていく。「【エチカ】は必然的に喜びの倫理でなければならない」のであり、「ただ喜びだけが私たちを能動に、能動的活動の至福に近づかせてくれる」のである。³⁸ 第一種の認識において、母の死並びにclub-footから生ずる受動的情動である、彼自身にも不明瞭な自己犠牲的な「喜び」を抱いていたPhilipは、それらを能動的情動としての「喜び」とする第二種の認識へと移行していくのである。

III

Spinozaは第二種の認識について、「事物の特質についての共通概念あるいは妥当な観念」であり、「理性」とも呼ばれるものであると定義している。³⁹ 「全ての人間に共通のいくつかの観念あるいは概念」である「共通概念」(“common notions”)は、「対象との関係を離れてそれ自体で考察される限り、真の観念のすべての特質、あるいは内的特徴を有する「妥当な(十全な)観念」(“adequate idea”)⁴⁰」であり、精神の能動はこの観念から生ずる⁴¹。何故なら、「すべて在るものは神のうちに在り」⁴²、「すべての観念は神に関する限り真である」⁴³からである。この場合の「神」とは、Philipが翻弄されていたキリスト教的神ではなく、「絶対に無限なる実有、言いかえれば各々が

37 *Ibid.*, p.31

38 *Ibid.*, p.47

39 Cf. 【エチカ】、第二部定理40備考二。

40 Cf. *Ibid.*、第二部定義4。

41 Cf. *Ibid.*、第三部定理3。

42 Cf. *Ibid.*、第一部定理15。

43 Cf. *Ibid.*、第二部定理32。

永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性からなっている実体⁴⁴としての「神」であり、「すべてのものの動力原因、それ自身による原因であり、絶対に第一の原因⁴⁵」である。

つまり、第二種の認識とは、「非十全な観念」の下で受動的な喜びを見出していた第一種の認識が、「十全な観念」の下で能動的な喜びへと移行したものである。Philipは、club-footから齎されるモラル的な「悲しみ」を捨て、エチカ的な「喜び」を見出す第二種の認識へと移行していく。

Philipは、パリでの画家修業時代に、詩人のCronshawに多大な影響を受ける。Cronshawの思想は、後に彼がPhilipに与えたPersian rugの中に集約されており、Philipはその意味するところを見出し、自らの手で彼自身の人生観を獲得する。Philipは、その人生観に辿り着くまでに幾多の哲学的考察を行い、一方ではMildredとの愛憎関係を繰り返しながらも、その関係に終止符を打つ方向へと徐々に向かっている。Philipは、貧困にあるMildredと彼女の子供を養うという自己犠牲の態度を再び取るが、その行為は以前と同様の自己犠牲から生ずる「喜び」ではなく、「理性」から生ずる「喜び」に近づいている。その証拠に、Mildredが彼のことを“‘Cripple!’ (p.480)”と罵り、彼の部屋のあらゆる物を壊し家を後にするという行動に対しても、彼は憎しみを覚えることが無いのである。「理性の導きに従って生活する人は、できるだけ自分に対する他人の憎しみ、怒り、軽蔑などを逆に愛あるいは寛仁で報いるように努める⁴⁶」ためである。友人Haywardの死を切っ掛けにPhilipが到達した人生観は、Persian rugに集約されている。

As the weaver elaborated his pattern for no end but the pleasure of his aesthetic sense, so might a man live his life, or if one was forced to believe that his actions were outside his choosing, so might a man look at his life, that it made a pattern. There was as

44 Cf. *Ibid.*, 第一部定義6。

45 Cf. *Ibid.*, 第一部定理16系。

46 Cf. *Ibid.*, 第四部定理46。

little need to do this as there was use. It was merely something he did for his own pleasure....In the vast warp of life (a river arising from no spring and flowing endlessly to no sea), with the background to his fancies that there was no meaning and that nothing was important, a man might get a personal satisfaction in selecting the various strands that worked out the pattern....His life had seemed horrible when it was measured by its happiness, but now he seemed to gather strength as he realized that it might be measured something else. Happiness mattered as little as pain....It would be a work of art, and it would be none the less beautiful because he alone knew of its existence, and with his death it would at once cease to be.⁴⁷

人生を Persian rug に準えたこの思想は、「我々は外部の諸原因から多くの仕方であかされること、また我々は旋風に翻弄される海浪のごとく自らの行末や運命を知らずに動揺することが明白になる」⁴⁸ことを物語っている。つまり、第一種の認識において、Philip にとって club-foot は受動的な「喜び」と「悲しみ」を齎すものである故、彼は人生において言わば漂わされる波であると言える。しかし、Philip は第二種の認識において、club-foot に翻弄される彼の人生は「幸福という尺度から測るとひどいものであるが別の尺度から見ることにも可能である」と認識し、「喜びを大なる完全性」へ、「悲しみを小なる完全性」へと移行したものであることを理解するのである。さらに、Philip は、理性に基づき「各人は自己の利益を求めべきであり」、⁴⁹人生の流れの中において各自が各々の「喜び」を見出すことを「共通概念」として捉えている。Philip の club-foot に対する認識は、受動的なものから能動的なものへと移行を果たしたのである。

しかし、「この共通概念そのものも、じっさいは第一種の認識の混乱した像と複雑な協調関係にあり、想像力の一定の性質をよりどころにして成り立つ

47 *Of Human Bondage*, pp.524-525

48 Cf. 【エチカ】、第三部定理59備考。

49 Cf. *Ibid.*、第四部定理18備考。

ている」故に、「個的・特異的な本質そのものを私たちに認識させるものではない。」⁵⁰「本質」を理解するためには第三種の認識へと移行せねばならない。

IV

Spinoza は第三種の認識について、「神のいくつかの属性の形相的本質の妥当な観念から事物の本質の妥当な認識へ進むもの」であり、「直観知」と呼ばれるものであると定義している。⁵¹「この第三種の認識から存在しうる限りの最高の精神の満足が生じ」⁵²、「我々は第三種の認識において認識するすべてのことを楽しみ、しかもこの楽しみはその原因としての神の観念を伴っている」⁵³のであり、「我々の精神はそれ自らおよび身体を永遠の相のもとに認識する限り、必然的に神の認識を有し、また自らが神の中に在り神によって考えられることを知る」⁵⁴のである。「物を第三種の認識において認識しようとする努力ないし欲望は、第一種の認識から生ずることはできないが、第二種の認識からは生ずることができる。」⁵⁵

つまり、第二種の認識において club-foot から齎される「喜び」と「悲しみ」についての理解を能動的に深めた Philip は、第三種の認識においてその「本質」について妥当な認識を持つことになる。Philip は、母の死並びに club-foot に基づく自己の「本質」を自覚する。

その一つ目として、母の死に関する認識が挙げられる。Philip は、彼が謙虚で信心深い人間になることを望んだ母の手紙を見つける。Philip は、感動すると同時に驚愕し（“It deeply touched and at the same time surprised him.” (p.555)）、母の期待とは程遠い人間に成長した自分を凝視し、母は死んでしまった方が良かったのだと感じ、その手紙を引き裂いてしまう。

50 Cf. ドゥルーズ, pp.153-154

51 Cf. 『エチカ』, 第二部定理40備考2。

52 Cf. *Ibid.*, 第五部定理27。

53 Cf. *Ibid.*, 第五部定理32。

54 Cf. *Ibid.*, 第五部定理30。

55 Cf. *Ibid.*, 第五部定理28。

Philipにとって母は、美しい女性としての表象でしかなかったが、実際は純粹に敬虔な信仰心を備えた女性であったことを Philip は認識する。母の死は、彼自身にも不明瞭な自己犠牲の「喜び」を齎すものであったが、母の「本質」を知った彼は、キリスト教的神への信仰心を排除した自己の「本質」と敬虔な信条を備えた母の「本質」は異なったものであることを認識するのである。Philip は母の存在を排除したのではなく、母と自己の「本質」を理解したのである。

二つ目として、club-foot に関する認識が挙げられる。Philip は、club-foot を自己の「本質」として受け入れたことを発端に、幾多の「本質」を認識していく。

He accepted the deformity which had made life so hard for him; he knew that it had warped his character, but now he saw also that by reason of it he had acquired that power of introspection which had given him so much delight. Without it he would never have had his keen appreciation of beauty, his passion for art and literature, and his interest in the varied spectacle of life. The ridicule and the contempt which had so often been heaped upon him had turned his mind inward and called forth those flowers which he felt would never lose their fragrance. Then he saw that the normal was the rarest thing in the world. Everyone had some defect, of body or of mind: he thought of all the people he had known (the whole world was like a sick-house, and there was no rhyme or reason in it), he saw a long procession, deformed in body and warped in mind, some with illness of the flesh, weak hearts or weak lungs, and some with illness of the spirit, languor of will, or a craving for liquor. At this moment he could feel a holy compassion for them all. They were the helpless instruments of blind chance. He could pardon Griffiths for his treachery and Mildred for the pain she had caused him. They could not help themselves. The only reasonable thing was to accept the good of men and be patient with their faults. The words of the dying God crossed his memory:

Forgive them, for they know not what they do.⁵⁶

Philip は、club-foot を、彼の人生を困難にし性格を歪めた「悲しみ」として否定的に捉えてきたが、それを美や芸術や人生に対する彼の内省力を高めてくれた「喜び」として肯定的に捉えている。つまり、Philip は「精神」と「身体」の合一という「本質」に到達したのである。また、Philip は、誰しもが身体的・精神的に欠点を有している故に、Mildred や Griffiths に対しても憐れみを持って許すことが可能となっている。彼は、唯一の道理的なことは人間の「善性」を認め、その欠点に対しては忍耐を持ってするということを認識するに至っている。さらに、懐疑論に陥りながらも（“I don't see why one should believe in God at all.” (p.117)）キリスト教的美德を排除出来ずにいた Philip は、「彼らを許したまえ、彼らはそのなすところ知らざればなり⁵⁷」というキリストの言葉を想起する。Philip は、第一種の認識においてモラル的「悲しみ」を引き起こすキリスト教的神の存在を否定的に捉えてきたが、club-foot と同様に「神」に対しても大きな認識の変化を起こしている。つまり、宗教的なモラルとしての神とは違う、エチカ的な「絶対に無限なる実有、言いかえれば各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性からなっている実体⁵⁸」としての「神」の認識である。Philip は、この「神」の観念の下に、「何びとをも憎まず、蔑まず、嘲らず、何びとをも怒らず……、隣人に対しては女性的同情、ないし偏頗心ないし迷信からでなく、理性の導きのみによって……、援助すべき⁵⁹」であるということを理解し、キリスト教的神の存在をエチカ的な「神」の存在として認識するに至っているのである。

三つ目として、自己犠牲の隷属状態からの解放が挙げられる。Philip は、最終章において、Mildred に似た女性を見て再び激情に駆り立てられる。彼

56 *Of Human Bondage*, p.604

57 Luke. 23:34.

58 Cf. 『エチカ』、第一部定義6。

59 Cf. *Ibid.*、第二部定理49備考。

は、Mildredとの愛憎関係で余りに苦しんだ為に、それから解放されるには死を待つのみであると感じるが、自らの手で彼の心からその激情の喘ぎをもぎ取るに至っている（“But he wrenched the pang from his heart.” (p.605)）。Philipは、隷属状態に陥る自分自身を認識し、その隷属状態を克服しているのである。

四つ目として、上記の三つの「本質」を具現化しているようなSallyとの結婚が挙げられる。⁶⁰ Sallyは、Philipのclub-footに対して人々が抱いていた嘲笑や憐れみの感情とは無縁の存在である。

‘How can you care for me?’ he said. ‘I’m insignificant and crippled and ordinary and ugly.’

She took his face in both her hands and kissed his lips.

‘You’re an old silly, that’s what you are.’ she said.⁶¹

Sallyは、人々がモラル的な「悪」として捉えていたclub-footを、Philip自身の「本質」として捉え受け入れているのである。また、Philipは、Sallyに妊娠の兆しが現れた為に、彼が切望していたスペインや東洋への旅を諦め、彼女との結婚に身を捧げることに自己犠牲の美しさを感じる。しかし、Sallyの妊娠が間違いであったことを知り、自由と同時に困惑を感じる（“He was free once more....He felt no exhilaration, but only dismay.” (p.606)）。Philipは、彼を結婚へと導いたのは彼の自己犠牲ではなく、妻と家庭と愛への「欲望」であったことを自覚し、自らを欺いていたことを知る。

He realised that he had deceived himself; it was no self-sacrifice that had driven him to think of marrying, but the desire for a wife and a home and love;...It seemed to him that all his life he had

60 Philipが、Sallyという彼の「本質」を理解する女性を最終的に選んだことは、Maugham著【月と六ペンス】(1919)において主人公Stricklandが、彼の意を解してくれ、レブラ病になった彼を捨てることのなかったAtaを選んだことにも通ずるものであると言える。Cf. Maugham, W. S. *The Moon and Sixpence* (Harmandsworth: Penguin Books, 1994)

61 *Of Human Bondage*, p.598

followed the ideals that other people, by their words or their writings, had instilled into him, and never the desires of his own heart. Always his course had been swayed by what he thought he should do and never by what he wanted with his whole soul to do. He put all that aside now with a gesture of impatience. He had lived always in the future, and the present always, always had slipped through his fingers. His ideals? He thought of his desire to make a design, intricate and beautiful, out of the myriad, meaningless facts of life: had he not seen also that the simplest pattern, that in which a man was born, worked, married, had children, and died, was likewise the most perfect? It might be that to surrender to happiness was to accept defeat, but it was a defeat better than many victories.⁶²

Philip は、自己犠牲の隷属状態から解放され、それまで従うことの無かった彼の真の「欲望」を自覚したのである。その「欲望」とは、母の死以来 Philip に齎されることの無かった家庭と愛情の獲得にあったのである。

Philip は、Sally との結婚により、club-foot, 母の死, 自己犠牲, 神に対する新たな観念, そして彼自身の「善」なる「欲望」を彼自身の「本質」として受け入れ、第三種の認識への移行を成し遂げたのである。

V

上述のように、Philip の club-foot 並びに母の死に纏わる認識の変遷は、Spinoza が示唆するところの、第一種の認識、第二種の認識、第三種の認識の移行に照合することが可能であり、「人間の絆」は「エチカ」の思想の多大な影響下にあると言える。

第一の認識におけるモラル的見地からすれば、club-foot とは克服すべき「悪」でしかなかった。しかし、第二種、第三種への認識の移行において、エチカ、つまり各個人の特性の合成としての「善悪」の見地からすれば、club-foot は Philip にとっての「善」と成り得るものなのである。これは、

62 *Ibid.*, pp.606-607

一凡人としての青年 Philip の問題に止まらず、モラルに準ずる社会構造の枠組みにおいて、己の欲望よりもその社会的モラルに従い生きることを強制される個人としての、我々自身の問題に転化されるものである。

Society stood on one side, an organism with its own laws of growth and self-preservation, while the individual stood on the other. The actions which were to the advantage of society it termed virtuous and those which were not it called vicious. Good and evil meant nothing more than that....*That* (society) uses the individual for its own ends, trampling upon him if he thwarts it, rewarding him with medals, pensions, honours, when he serves it faithfully; *this*, strong only in his independence, threads his way through the state, for convenience' sake, paying in money or service for certain benefits, but with no sense of obligation; and, indifferent to the rewards, asks only to be left alone (emphasis added).⁶³

【人間の絆】における社会と個人に関するこの思想は、個人の「本質」の認識の向上を考慮するには、個人という概念が個人の集合体である社会基盤の上に成立可能であり、個人が各々の「本質」を捨てて社会の齎すモラルに服従させられているという観点が必要である一方、社会において抑圧される個人自身も、何らかの恩恵を享受する為に、自己の利益よりも社会の利益に貢献しているということも認識されねばならないというものである。この思想は、【エチカ】における Spinoza の解釈に準ずるものである⁶⁴。それは、「社会自身が各人の有する復讐する権利及び善悪を判断する権利を自らに要求し、これによって社会が共通の生活様式の規定や法律の制度に対する実権を握るようにし」、「何が善であり何が悪であるかが決定されて各人が国家

63 *Ibid.*, p.259

64 Maugham は、【月と六ペンス】、【かみそりの刃】(1944)においても、社会と個人の服従関係や墮落する西洋社会における個人の生き方に関する見解をその主題としている。【人間の絆】(1915)において自己の「本質」を西洋社会に見出すことの出来た Philip、【月と六ペンス】(1919)において西洋社会とは異なる東洋の地に生きる場を見出した Strickland、【かみそりの刃】(1942)においてインド神秘思想に辿りついた Larry、と言う様に、20世紀に入り終末思想の漂う衰退化する西洋社会において、如何に個人が個人としての「本質」を全うしていくのかという問題を、Maugham はこの Spinoza の観点から探求していると言える。Cf. Maugham, W. S. *The Razor's Edge* (London: Random House, 2000)

(社会)に服従するように義務づけられ(括弧内筆者)⁶⁵ている一方、「実際、人間の共同社会からは損害よりもはるかに多くの利益が生ずるような事情になっている⁶⁶」という社会・個人の服従関係に対する批判的な思想である。モラルに支配される社会において、「社会的動物」(“a social animal”)⁶⁷としての個人が、如何にしてエチカの立場から各々の「本質」を把握し、社会ではなく自己の利益を求めるためにその「本質」に従い生きるべきであるのか、且つ、個人をその服従対象と見なす社会が進むべき新たな方向性を、「人間の絆」及び「エチカ」は第一種から第二種、第三種への認識の移行において、我々に投げ掛けているのである。

References

Works:

- Bloom, Harold, ed. *The Bible*. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- Deleuze, Gilles. *Spinoza and the Problem of the Expression*. Trans. Kudo, Kisaku, Yasuko Koshiba and Haruo Kotani. Tokyo: Hosei Univ. Publisher, 1991.
- . *Spinoza: Philosophie Pratique*. Trans. Gadai Suzuki. Tokyo: Heibonsha, 1995.
- . *Spinoza: Practical Philosophy*. Trans. Robert Hurley. San Francisco: City Lights Books, 1988.
- Maugham, W, S. *Of Human Bondage*. Harmondsworth: Penguin Books, 1992.
- . *The Moon and Sixpence*. Harmondsworth: Penguin Books, 1994.
- . *The Razor's Edge*. London: Random House, 2000.
- . *The Summing Up*. Harmondsworth: Penguin Books, 1963.
- Spinoza, Benedict de. *A Spinoza reader: the Ethics and other works*. Trans.

65 Cf. 「エチカ」、第四部定理37備考二。社会と個人、つまり国家と国民との関係に関しては、Spinoza 著『国家論』(1677)において、より詳細な定義がなされている。Paul Hazardは、Spinozaの『神学・政治論』(1670)並びに『エチカ』が墮落傾向にある西洋キリスト教社会の根底を覆す書であることを指摘している。Hazard, Paul. *The Crises of the European Conscience (1680-1715)*, Trans. Kyo Nozawa. (Tokyo: Hosei Univ. Publisher, 1982), pp.169-176

66 Cf. 「エチカ」、第四部定理35。

67 Cf. 「エチカ」、第四部定理35備考、並びに *Of Human Bondage*, p.50において記述されている。

- and ed. Edwin Curley. New Jersey: Princeton University Press, 1994.
- . *Political Treatise*. Trans. Naoshi Hatanaka. Tokyo: Iwanami Shoten, 1988.
- . *The Ethics*. Trans. Naoshi Hatanaka. Tokyo: Iwanami Shoten, 2000.

Biographies and Criticism:

- Burt, Forrest D. *W. Somerset Maugham*. Boston: Twayne, 1986.
- Calder, Robert Lorin. *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom*. London: Heinemann, 1972.
- Cordell, Richard A. *Somerset Maugham: A Biographical and Critical Study*. Bloomington: Indiana University Press, 1961.
- Cullmann, Oscar. *Christ and Time*. Trans. Goro Maeda. Tokyo: Iwanami Shoten, 1962.
- Curtis, Anthony. *Somerset Maugham*. London: Macmillan, 1977.
- Hampshire, Stuart. *Spinoza*. Harmondsworth: Penguin Books, 1951.
- Hazard, Paul. *The Crises of the European Conscience (1680-1715)*. Trans. Kyo Nozawa. Tokyo: Hosei Univ. Publisher, 1982.
- Marlow, Louis. "Somerset Maugham," *Writers of To-day 2*. Ed. Denys Val Baker. London: Sdgwick and Jackson Ltd., 1948.
- Nakamura, Hajime. *The Comparative Thoughts*. Tokyo: Iwanami Shoten, 1986.
- Rogal, Samuel J. *A William Somerset Maugham Encyclopedia*. Westport, CT.: Greenwood Press, 1997.
- Tanaka, Toshihiko. "Traité de l'individu (I)—l'individu-mode cheza—". *The Kobe Gaidai Ronso*. (Kobe City Univ. of Foreign Studies) 40. 2 (1989). 1-36
- Ward, A.C. *Twentieth-Century English Literature*. London: Methuen & Co Ltd., 1964.